

このところ、テレビなどで企業や個人のお詫びの会見を良く目にする。「不徳の致すところ」「ご心配を」「ご迷惑を」「断腸の思い」「真摯に受け止め」……みんな同じように神妙な顔つきで何度も頭を下げながらお詫びの言葉を口にする。まるで形状記憶のようなパフォーマンスが繰り返される。その言葉と裏腹に、プライドを抑えるのに必死なのか、平板な口調になる。多分コンサルタント等の指導のもと、頭を下げる角度やタイミングや時間も似通っている。残念ながら、そこに「心」は感じられない。なんとか早くこの場を切り抜けようとする心中しか伝わってこない。

その最たる場面を、舛添前都知事の一連の疑惑会見で見て怒りを感じた。都知事辞任後も怒りを禁じ得ない。この怒りはどこからくるのだろうか。これまで、もっと大きな問題を起こした人も多くいるが、これほどの怒りを感じていなかったように思う。メディアの取り上げ方の加減かとも思うが、それともまた違うような……。何やらなかなかモヤモヤが消えない。

そのお詫び会見の中で、非常に気になったフレーズがある。そのひとつが、「ご心配をおかけしていることを心からお詫びします」。こういう場でよく使われる常套句だと思うが、誰も心配はしていない。怒っている人、呆れている人は多くいるが、心配しているのは、おそらく家族や身内のスタッフくらいだろう。あれだけ人々が怒りをあらわにしている中、「ご心配をおかけし…」はない。周りが自分のことをどう思っているかを十分理解していない。空々しいと感じるフレーズだ。

さらに今回一番気になったのが、「～したいと思います」の連発。「心から反省したいと思います」、「粉骨砕身、都政の運営に努めて参りたいと思います」、「宿泊費や飲食費の支出について、これは返金したいと思います」、「慈善団体に寄付したいと思います」……といった調子。このように断定を避ける言い方は、おそらく後々突っ込まれないための方策なのだろう。「あの時、ああ言ったじゃないか！」と言われても、「いや、そうしたいと思います、と言っただけで、やると断言はしていません」と言い返せるように、という気持ちが働いている。早くこの疑惑から逃げ切ろうとする魂胆が見え見え。現に、辞職後これらはほとんど実行されていないようだ。

しばらくメディアを席卷してきた「舛添狂想曲」は、知事の辞職と引き換えに、諸々の疑惑が放置されようとしている。これでいいのか。舛添さん、「第三者」の弁護士さん、「法に触れなければ、何をやってもいいんですか！」。